

自省的態度を報告する文はいかにして 分析されるべきか

森永 豊

1. 問題設定

本稿は自省的態度を報告する文の意味論についての考察である。考察の足掛かりに用いるのは、ヒギンボタム (James Higginbotham) が近年行った議論である。この議論に対する批判的考察を経た後で、自省的態度の意味論的考察に「視点」という考え方を導入することを提案したい。

自省的態度、あるいは *de se* の態度とは、心的態度を持つ主体本人の性質、状態、行為、またはその主体と他の対象との関係を内容とする心的態度をいう。たとえば、私は自分自身が高尾山に登ったことを憶えている。この心的態度の主体である私は、私自身の過去の行為を内容とする記憶を持っている。たとえばまた、太郎は、花子から自分自身が愛されていると信じている。この心的態度の主体である太郎は、太郎自身と花子の関係を内容とする信念を持っている。このように、自省的態度の帰属は一人称においても他の人称においても可能である。つまり私たちは自分自身だけでなく、それ以外の人物にも自省的態度を帰属することが可能である。自省的態度を主体が表明する場合、ありふれた文脈では「私」の現れを持つ (1) のような言明 (一人称言明) が用いられる。

(1) 私はケーキをふたつ買った。

この言明を主体が発話することによって、自分自身がケーキをふたつ買ったという一階の自省的信念が表明される。これを太郎の態度として、第三者が報告する場合に、たとえば「太郎は自分自身がケーキをふたつ買ったことを憶えている」という文が用いられる。一人称言明における「私」は報告において「自

分自身」に置き換えられている。これらの語は、自省的態度との関連においてある種の結びつきを持つことが予想される。一人称言明と自省的態度の帰属の間の結びつきについて、本稿の考察によってより具体的な示唆を与えることを試みる。

自省的態度は、心的態度の内容が何であるかを論じる上で一つの重要なトピックとなってきた。古典的な見解では、「主体がPと信じる」という言明において、信念は主体とPの二項関係として分析され、またPは命題を表現すると考えられる。命題は真理値の担い手ともなるが、その真理値は不変であると考えられる。主体はPと信じることによって、そのような命題を信じていると見なされる。さらに、命題がどう個別化されるかという点に関して、古典的な見解がどういう答え方をするかも述べておきたい。まず明らかなのは、命題の個別化にとって、命題の真理値が一致している必要はあるが、真理値が同じであっても、だからといって同一の命題であると考えすることはできない。よって、命題の個別化には真理値の一致よりもきめの細かい条件が要求される。古典的な見解によれば、その条件とは意義(sense)が等しいことである。意義が厳密になんであるかはそれほど明らかではなく、ここで明らかにすることもできない。だが意義とは、次の点が確保できるような概念である。すなわち、ふたつの名辞は、たとえいずれも同じ対象を指示するとしても、異なる意義を持ちうる。言語を習得した誠実な主体が、「明けの明星が見える」に同意しつつ、「宵の明星が見える」に同意しないことがありうる。したがって、「明けの明星」と「宵の明星」が現に同じ対象(金星)を指すとしても、主体が二つの文を肯定的に受けとめるかどうかについて違いが生じうる。この違いがふたつの名辞の意味の違いに存するのだとしたら、指示対象以外の意味論的な概念が必要である。すなわち、われわれには意義が必要である。意味論的値を持つあらゆる表現に対してこのアイデアを一般化すると、次のようになる。真理値が異なるふたつの文、異なる対象を指示するふたつの名辞、異なる外延をもつふたつの述語は、いずれも異なる意義を表現している¹。古典の見解における意義とは、表現の意味論的値を定める記述的条件のことである。異なる表現には異なる記

述的条件が結びついているため、たとえ同じ値が表現に割り振られても、その値の与えられ方、あるいは記述的条件の違いによって表現の意味は異なりうるのである。かくして古典的な見解において、命題とは文の表現する意義、あるいは思想 (thought) のことである。

ところが、自省的態度はこの古典的な見解に対して重大な疑義をもたらす。もし、信念が主体の行動を説明するものであるならば、古典的な見解は成り立たない。ペリー (John Perry) の買い物客の事例を使ってこれを概説しよう。買い物カゴを引いたあるスーパーの客が、通路に砂糖の線を見つける。彼は破れた砂糖の袋を入れたカゴを引いている客がいるとにらみ、注意しようとその客を探し始める。線を辿りながらスーパー内をウロウロした挙句、破れた砂糖の袋でスーパーを汚している買い物客が彼自身だったことに気が付く。この事例の最初、彼は事象関与 (de re) 的な言明 (2) で表明される非自省的な信念を持つ。

(2) 破れた砂糖の袋を持つ買い物客が店を汚している。

そして、犯人を突き止めた時、彼の心的態度は自省的な信念に変化している。

(3) 私が店を汚していたのだった。

もしスーパーを汚している買い物客が前方に特定できたならば、彼は足を速めて追跡を続行するだろう。だが、もしそれが彼自身だと知ったならば、追跡を止めて自分のカゴを点検するだろう。自省的態度を獲得することは、主体の行動を特定の方向へと変化させる。そして、主体の行動の変化が信念の変化に基づいて説明されるならば、行動の変化前である (2) と変化後である (3) は、異なる信念を表明したものと考えなければならない。ところが、古典的な見解に従うと、(2) と (3) を使って行動の変化が説明できない。直観に従うと、(2) は行動の変化後も正しい言明であるが、(3) は変化前では誤った言明である。こ

の点は態度帰属に関しても同様である。主体の行動が変化する前に、第三者が、「彼は自分自身が店を汚していると信じている」と報告することは正しくない。一方で、「彼は破れた砂糖の袋を持つ買い物客が店を汚していると信じている」という三人称的な帰属は、行動の変化の前後に関わりなく正しい。古典的な見解は、この直観を意義の違いによってすくいとろうとする。(2)の「破れた袋を持つ買い物客」の現れと(3)の「私」の現れは、いずれも同一の対象を指す。だが、それぞれが異なる意義を持つため、結果として文の意義も異なる。(2)と(3)で表明される信念は、異なる命題を内容とするとみなされ、したがって、それぞれが異なる信念を表明しているのである。しかし、「私」や「自分自身」といった指標詞は、それが使用される場面を抜きにしてその指示対象を語ることが意味を為さない表現である。指標詞は、それを含む文が発話される文脈に応じて指示対象が決まるものである。では、指標詞に対して、この買い物客に指示を固定するような記述的条件を与えることができるだろうか。特に、話者がそのような条件を発話のたびに把握していると考えられるだろうか。そのような条件を考えることはできないというのが一致した考え方である²。こうした議論が登場して、信念の内容は命題ではないと考える立場、あるいは工夫を加えて古典的な見解を守る立場等、さまざまな説が登場した³。古典的な見解に対する反論によって生じてくる関連した問題を述べるために、自省的態度の帰属に用いられる文の型を与えておく。「 $P_{(主体自身)}$ 」は自省的態度の内容を表す。「主体が $P_{(主体自身)}$ という心的態度を持っている」を自省的態度の帰属に用いられる文の型とすると、古典的な見解が自省的態度の分析としてうまくいかない時、この心的態度は何項関係なのか。そして、 $P_{(主体自身)}$ は命題なのか、それとも性質などの他のものなのか。また、自省的態度は非自省的態度からどのような点で区別されるのか。 $P_{(主体自身)}$ は非自省的態度の内容とどのような点で違った性質をもつのだろうか。

この課題に応じるスタンダードな方法は、自省的態度を報告する文の意味論を与えることである。これは、心的態度を報告する文が心的態度の内容を表示するという自然な考え方を前提した方法である。ヒギンボタムの近年の考察は、

この方法を採用して為された議論のひとつである。彼は次のテーゼを受け入れたうえで議論している。

〈一致テーゼ〉 自省的態度を報告する文は、その構文論的・意味論的特徴が報告される自省的態度のもつ特徴に対応しており、かつ、その心的態度が生起している時、そしてその時のみ真となる。

自省的態度には、その内容や構造と一致した報告文が対応づけられているというアイデアが、このテーゼのポイントである。このテーゼが正しければ、自省的態度を報告する文の論理形式を明らかにし、文の各構成要素に意味論的値を割り当てることで、自省的態度の本性を明らかにすることができる。自省的態度を報告する文の性質を調べれば、上に挙げた問題に答えることになるというのが、このテーゼを支持する動機である。

だが、心的態度の本性をその報告文の意味論を与えることで解明するという方針は、一般にどれほど通用しうるものだろうか。この方針は少なくとも自省的態度以外の心的態度の場合で反例に直面している。以下は言表関与的 (de dicto) な心的態度の事例である⁴。

ある学会が催され、シークレット・スピーカーとしてカプラン教授が呼ばれていた。しかし、交通状況のせいでカプラン教授は予定の開始時刻に到着できそうもない。主催者は聴衆に「本日のゲスト・スピーカーは到着が遅れる予定です」とアナウンスした。一方、カプラン教授の方は、同行者と共に会場に向かう途中である。遅刻の可能性に気をもむ同行者に対して、彼は次のように述べた。

(4) The audience knows that I will be late.

“I” は発話者であるカプラン教授を指示することを確認しておこう。聴衆が実際に知っているのはその日のゲスト・スピーカーの到着が遅れるということで

あり、カプラン教授の到着が遅れるということではない。この事例では、主体の信念が言表関与的であるにもかかわらず、報告は事象関与的である。それでもこの報告はごく自然なものである。そしてあとで議論するように、自省の態度においても、報告と報告される心的態度の間にこうした様態の不一致がありうる。スタンダードな方法は捨てるをえないと私は考えており、以下では、この観点からヒギンボタムの議論を検討する。

とはいえ、報告と心的態度の間で様態が必ずしも一致しないことは、報告が心的態度とまったく無関係に為されうることを意味しない。心的態度を報告する文の意味にとって、主体が実際に持つ心的態度は何らかの仕方で関係しているはずだ。この関係にある角度から光を当てることが、本稿のねらいである。以下で私は、この関係を論じるにあたって、「視点」というアイデアを用いることが一案であると論じる。

本稿の構成を述べよう。まず、ヒギンボタムの自省の態度に関する考察⁵を紹介する(2節)。そして3節では、彼の議論を批判する。4節では、自省の態度の報告文にとって主体の心的態度がどのような仕方で関係するのかを「視点」というアイデアを用いて論じる。

2. ヒギンボタムの議論

本節では、ヒギンボタムの自省の態度に関する考察をその要点に従って再構成する。ヒギンボタムは、自省の態度が誤同定免疫 (immunity to error through misidentification) という概念と本質的に関係すると考えた。前節で述べたように、彼は自省の態度の報告文に意味論を与えることが、自省の態度の解明になると考えている。そこで彼の負う課題は、自省の態度が持つ誤同定免疫という性質を、その報告文の論理形式に実装することである。

最初に誤同定免疫がどういう概念であるかを必要な範囲で特徴づけておきたい。誤同定免疫とは、特定の対象に関する判断が担いうる性質である。私が、花子はくつろいでいるという判断を下すとす。しかし、「花子」で特定され

た人物が、実は花子ではなかったことが明らかになるとする。判断が誤同定免疫をもつ場合、その判断はこのような対象の取り違えに対する免疫をもつ。言い換えると、その判断は性質や関係の帰属先となる対象を取り違えることで偽になるという可能性をもたない。ただし、誤同定免疫は判断を無謬にするわけではない。花子その人が、実はくつろいでいるのではなかったという可能性もあるので、この判断において、私が述定に関して誤りであった可能性もある。誤同定免疫は、判断が偽である可能性の中で、対象の同定について偽である可能性だけを排除する。そうした性質を持つ判断の典型としてしばしば挙げられるのは、私に痛みがあるという一人称の感覚帰属の判断である。実際に痛みがあると想像し、「痛みがあるのは私ではないかもしれない」と疑ってみてほしい。そのようなことは不可能であると思われる。

自省的態度が誤同定免疫を持つとヒギンボタムが述べる時、彼の考えはこうである。たとえば私は、自分自身が高尾山に登ったと信じている。この自省的態度において、「私」と「自分自身」は同一の対象、すなわちこの信念を持っている主体を指示している。これに加えて、この自省的信念の主体は、「自分自身」が主体本人を表示することを自覚しているのだから、主体は、「自分自身」がまさに主体本人を表示するという点について誤りえないと考えているだろう。この点において、私に痛みがあるという判断と自省的判断は類似しているとヒギンボタムは考えている。

ヒギンボタムは誤同定免疫の適用範囲を拡張しようとしている。一方で、自己知の文脈で誤同定免疫を持つと言われるのは、心的態度の担い手である主体である。つまり、「私はPであると信じている」における「私」に関して、この判断は誤同定免疫を持つと言われる。他方で自省的態度は、心的態度の内容に主体本人を表示する構成要素（典型的には「自分自身」）を持つ。ヒギンボタムは、判断がこの構成要素に関して誤同定免疫を持つと言いたい。つまり、心的態度のスコープの内側へと誤同定免疫の適用範囲を拡張しようとしている。より正確に言うと、彼は次に述べる誤同定免疫の基本的な特徴に着目して、自省的態度がその特徴を持つことを主張している。すなわち、誤同定免疫を持つ

判断は、同定的信念を介した推論によって獲得されるものではないという特徴を持っている。私に痛みがあるという判断が、「私」という構成要素に関して誤同定免疫を持つのは、「私」が何かと同じであるという同定的信念を介して獲得されるとは考えられないからだ。まさに同様のことが、自省的態度の内容を構成する「自分自身」といった要素にも成り立つとヒギンボタムは主張しているのである。私は自分自身が高尾山に登ったと信じているという事例において、前方照応的な要素（「自分自身」）によってこの心的態度の主体本人が心的態度の範囲内に表示されている。この表示が同定的信念を介して可能になるとは考えられない。ヒギンボタムはこのような直観に従って意味論的分析を進める。彼がコミットしている考えをテーゼの形で述べておこう。以下に現れる「同定的信念」とは、「太郎は、対象が自分自身だと信じている」というタイプの信念である。

〈非推論性テーゼ〉自省的態度の内容は、同定的信念を前提にした推論によって得られたものではない⁶。

以上に述べた洞察を軸にして、ヒギンボタムは自省的態度を報告する文の分析に取り組む。彼は、自省的態度を表示する英語の文に注目して、その論理形式を提案している。

(5) John expects to win.

(5)の論理形式を書く準備として、以下にヒギンボタムの分析のポイントを書き出していこう。

- “win”の了解上の主語は、“expects”と“to”の間にあるゼロ代名詞である。このゼロ代名詞は“John”を先行詞にとる前方照応詞であるから、“John”と同じ対象を指示する。

- ・ヒギンボタムは、「予想」, 「記憶」, 「信念」といった心的態度も出来事と見なす。また、彼は出来事存在論的分析に関してデイヴィドソンと同じ立場⁷に立つので、(6)は(7)のような仕方で記号化される。

(6) Anna eats a sandwich.

(7) $\exists e$ [eat a sandwich (Anna, e)]

- ・ジョンが予想している内容は、古典的な見解に従えば命題である。だがヒギンボタムにおいて、その内容はこれから生じる出来事が「勝つ」という性質を持つことである。そして彼は、性質に関してモンタギュー流の内包論理にしたがっているため、性質を可能世界から対象の集合への関数と考える。たとえば、“An egg falls off in w ”は、「可能世界 w においてタマゴが落ちるという性質を持った出来事が少なくともひとつ存在する」ということであるから、可能世界 w とそのような出来事の関係は「タマゴが落ちる」という性質の可能世界 w における例化とみなされる。一方、内包論理を使って古典的な見解を解釈すると、ジョンが予想している内容は命題だから、対応する内包は可能世界から真理値への関数であることになる。性質に対応する内包を区別するために、これを出来事文の先頭に「 \wedge 」を付ける記号法で表す。

以上のポイントに従って、(5)は次のように書き換えられる。

(8) $\exists e$ [expect (John, e , $\wedge \lambda e'$ (win (experiencer of e , e')))]

“experiencer of e ”はヒギンボタムが導入したものであり、これは e からその経験主体を返す関数である。すなわちこの関数は、問題となっている出来事を構成する各要素の中から、その経験主体であるものを値として返すよう要求する。(8)における「 e 」の経験主体はジョンである。したがって、“experiencer of e ”と

“John” は共にジョンを指示している。そこで、(8) を非形式的に言い直すと次のようになる。すなわち、出来事 (e) の経験主体が勝つこと (e) という性質がジョンに帰属すると予想するという心的態度 (e) が存在する。

(8) における “*experiencer of e* ” は、ヒギンボタムの分析の方針と自省的態度の本性に関する洞察を集約したものと考えることができる。ヒギンボタムが (5) の意味論的分析に “*experiencer of e* ” を導入する哲学的な動機は、自省的態度が誤同定免疫の特徴を備えているという論点をその論理形式に反映させるためである⁸。彼は報告文が主体の心的態度の内容を表示するような論理形式をもつという前提(一致テーゼ)を置いて議論している。(5) の持つ論理形式は、ジョンの心的態度を自省的なものとして表示するよう意図されている。

ヒギンボタムの意味論的分析が、非推論性テーゼをどう反映したものになっているかを明らかにしておこう。(5) を (8) のように分析することは、(5) で報告される自省的態度の内容が同定的信念によって導かれないことを実際に反映している。(8) の表示している心的態度の内容、すなわちモンタギュー流に分析される性質が、同定的信念を前提にした推論の帰結になっていると考えるとどうなるだろうか。その場合、“*experiencer of e* ” が勝つという出来事を結論とし、“*experiencer of e* ” と何かが同一であるという信念が前提となる推論があることになる。だが、“*experiencer of e* ” における “ e ” は、その推論の帰結を一部とする心的態度 (e) を参照している。推論の前提が帰結となる態度内容を含む心的態度を参照するのはおかしい。だから、同定的信念を前提にした推論において (8) が帰結になることはありえない。また、次のように論じることもできる。すなわち、“*experiencer of e* ” だけが (8) から独立して前提の論理式に入るということは、“ e ” が自分を束縛している量子子の外に出るということである。それは、変項 e の意味を変えてしまうことであり、許されない。よって、やはり (5) は同定的信念を前提にした推論の帰結とはなりえないのである。

まとめると、“*experiencer of e* ” の導入を動機づけているのは非推論性テーゼが体现していると考えられる誤同定免疫の特徴である。すなわち、自省的態度において、関連する構成要素の指示対象は、同定的信念を介した推論を経由せ

ずに心的態度の内容で表示される。この性質を表現することが、自省的態度を表示する報告文を分析する際にヒギンボタムが課す制約である。(8)の論理形式は実際にこの制約に従っている。

本節では、自省的態度の本性を解明する課題に対する意味論的分析からのアプローチとしてヒギンボタムの議論を紹介した。これに対して、ふたつの論点で問題が生じる。ひとつは、このアプローチが正しいかどうかという問題、言い換えると、一致テーゼが正しいかどうかという問題である。もうひとつは、彼の非推論性テーゼが正しいかどうかという問題である。次節でこれらの点を論じる。

3. ヒギンボタムの議論に対する反論

本節ではヒギンボタムの議論に対する反論を提示したい。

最初に議論するのは一致テーゼである。自省的態度を報告すると考えられた文(5)“John expects to win.”は、これを用いて自省的態度以外の心的態度を報告する場合がある。次の状況を考えてみよう。ジョンは最も練習した者が勝つという信念を持っている。そして彼は、自分こそが最も練習した者であると信じている。これらから、ジョンの自省的態度、すなわちジョンは自分自身が勝つと予想しているということが推論できる。だが、ジョン自身がこの推論を実際に行っているとは限らない。ここでジョンが「あなたは自分自身が勝つと予想しているのですか？」と尋ねられて、「いいえ」と答えるとする。このことはジョンの思考が遅いことを示すだろうが、思考が遅いことはその人を不合理にするわけではない。われわれの思考は、おおむねジョンほどではないとしても、ゆっくりと進む。ジョンの合理性を維持したまま、この想定が可能であると思われる。この事例で、ジョンの信念を報告する際に、われわれは(5)を使うことができるように思われる。だが、この事例における(5)は、けっしてジョンが自省的態度を持つことを述べたものではない。その内実はあくまでも、「ジョンは最も練習した者が勝つと信じており、かつ、彼は自分こそが最も練習した者

であると信じている」ということである。それゆえ、(5)を用いて自省的ではないジョンの心的態度を報告する場合がある。したがって、一致テーゼには反例がある。

ヒギンボタムは、(8)が(5)の正しい分析ではなかったことを認めるか、一致テーゼをある仕方で維持する方策として(5)の多義性を主張するなど、他の仕方に対処する必要があるように思われる。多義性に訴える場合、ジョンの自省的態度を報告する使われ方と、いまの事例のような言表関与的態度と同定的信念の連言を報告する使われ方のそれぞれに対応した意味を(5)に与えることになる。たしかに、多義性に訴えることは語の用法が複数あることが観察される場面で常に開かれた選択肢である。(5)の多義性を主張できるかどうかは慎重に検討されるべきことであり、本稿で論じうるスペースを超えてしまう。いま確認しておくべきことは、多義性の主張は語用論的な説明など、他の方策が利用可能である場合には避けるべきであるということだ⁹。言語の探究におけるこの一般的な指針に従えば、多義性の主張はここで直ちに選ぶことが許される選択肢ではない。(5)の表示する心的態度が自省的態度であるという考えを維持する限りで、上の事例は困難をもたらす。この主張を維持しうる理由を彼は挙げられるだろうか。少なくとも今のところ、問題の事例は、一致テーゼへの反例として認められるべきである。

非推論性テーゼ(自省的態度の内容は、同定的信念を前提にした推論によって得られたものではない)も、それ自体で問題をはらんでいる。1節で挙げた買い物客の事例は、自省的態度の獲得に関する事例である。店を汚している買い物客を追跡している人物の心的態度の変化を、どういう仕方で説明するのが適切だろうか。容易く思いつくもっともな説明は、非推論性テーゼに反するものである。すなわち、この人物は追跡中の買い物客が実は自分自身だったと信じることを介した推論によって、という説明である。言い換えると、同定的信念を前提して、「私は自分自身が店を汚していると信じている」という自省的態度を持つに至った、という説明である。2節で確認したことだが、誤同定免疫を持つ判断は、同定的信念を介した推論によって獲得されたものではない。

今の説明によると、「私が店を汚していたのだった」という買い物客の判断は、この特徴を持たないことになる。よって、問題の心的態度は誤同定免疫を持たない。さらに、1節で述べたような主体の行動の変化が自省的態度の獲得から説明されるものであるならば、問題の心的態度はまさしく自省的態度の一例である。したがって、今の説明に従うと、買い物客の事例において、「彼は自分自身が店を汚していると信じている」という心的態度を帰属することが非推論性テーゼに対する反例となるのである。こうした説明が正しくないと示すことは、その自然さの点から見て、容易ではないと思われる。これに対するヒギンボタムの応答は、実際のところ非推論性テーゼを暗に下敷きにして、自省的態度の独特さを擁護するものになっている¹⁰。ヒギンボタムは、強い一人称的な仕方における自分自身についての思考 (thoughts about oneself in the strong, first-personal way) と自分自身であることが後に判明するものについてでしかない思考 (thoughts literally about something that turns out to be oneself) を区別している。そして、後者は記述を媒介して獲得され、事象関与的態度の報告が許されるような言表関与的態度でしかないと述べられる。つまり、彼は後者を、本質的に指標的な要素を含む自省的態度から区別されるものであると考えている。ヒギンボタムにおいて、自省的態度でありうるのは、前者の強い一人称的な仕方における自分自身の思考だけである。「強い一人称的な仕方」が何を意味するのかを、ヒギンボタムははっきりと述べていないが、それは非推論性テーゼを満たすような態度の特徴であると思われる¹¹。つまり、記述や知覚を媒介して対象を特定し、それが自分自身であることが後で明らかになるというプロセスが、彼の論述では一貫して自省的態度を獲得する仕組みから排除されている。以上からヒギンボタムは、自然な説明を受け入れつつ、スーパーの事例において獲得されたのが自省的態度ではないと考えるか、買い物客が同定的信念を介さない手順で自省的態度を獲得したと説明するかのいずれかを選ぶことになると考えられる。いずれにしても、ヒギンボタムにとって上に述べた自然な説明は、自省的態度の獲得に対する好ましい説明ではない。彼の議論において、非推論性テーゼは常に踏まえておくべき自省的態度の特徴として扱われており、

それ自体に対する十分な正当化は与えられていないと言わざるをえない。こうした議論の傾向も、彼の(5)に対する意味論的分析から動機を奪っているように思われる。

本節では、ヒギンボタムのふたつのテーゼを批判した。自省的態度の本性の解明に向けたヒギンボタムのアプローチには誤った前提が含まれている。また、非推論性テーゼには彼が意図するような正当性がないと思われる。

4. *de se* 様態における心的態度と報告の関係

本節では、*de se* に関する心的態度と報告の関係を論じる。これまで見てきたことは、一つの心的態度の報告文を使って、多様な心的態度が報告できるということだ。心的態度の報告文と心的態度は、すっきりと対応する組を作れるような関係を持たないのである。だが、この事実は、帰属と報告が無関係であることまで意味するものではない。本節では心的態度の帰属と報告の間にある関係を論じたい。

心的態度の報告文は報告される心的態度の内容を表示しているという、一見するともっともらしい考えは、おそらく維持できないとしても、なお自然な考え方として、自省的態度の報告にとって、主体の心的態度は何らかの仕方で関係しているはずだ。考察の進展のために、是非とも説明の鍵になる要素を絞り込みたい。カプラン教授の(4)“The audience knows that I will be late.”を思い出そう。これは、発話の文脈でカプラン教授を指示する要素“I”をもつような事象関与的な報告文によって、聴衆の言表関与的な態度を報告する例であった。学会の聴衆が実際に知っているのはその日のゲスト・スピーカーの到着が遅れるということであり、カプラン教授の到着が遅れるということではない。だから、(4)に対して仮に聴衆が反応するとすれば、彼らは次のように抗弁しうる。

(9) We didn't know that Professor Kaplan would be late!

にもかかわらず，(4)は聴衆が知っていることに対する適切な報告になっている。他方で，心的態度の報告に *de se* が関与する場合はどうだろうか。自省的態度を報告できる(5)“John expects to win”を再びとりあげよう。前節のジョンの事例を部分的に変更して，報告者は次の①～③を知っているとしよう。

- ① ジョンは最も練習した者が勝つと予想している。
- ② だがジョンは，最も練習した者は自分だという信念を持っていない。
- ③ ところが実際は，最も練習した者はジョンである。

このような場合，この報告者が(5)を用いてジョンの心的態度を報告することは適切だろうか。②により，この場面でジョンは同定的信念を持っていないので，前節の事例と違い，ジョンは推論を介して自分自身が勝つという自省的態度(予想)を持つことができない。この点が，カプラン教授の事例において聴衆が事象関与的な信念をもてなかったことと類似している。(5)に対するジョンの反応は，ジョンを誠実であると見なせば，次のような抗弁でありうる。

(10) I don't think that I am the one who will win!

言表関与的な予想しか持たないジョンが(10)のように抗弁しうることは，言表関与的な信念しか持っていない聴衆が，カプラン教授に対して(9)のように抗弁しうることに同様である。だが，カプラン教授の事例と対照的に，ジョンの心的態度を(5)で報告することは不適切になる。すなわち，報告に対する主体の肯定が期待されない状況では，(5)は不適切だ。

対象の特定を欠いた言表関与的な心的態度を報告するとき，*de re* (事象関与的)の場合と違い *de se* の場合ではなぜ不適切になるのだろうか。本稿でこの問いに満足な仕方では答えることはできないが，それに向けたたたき台としてのアイデアを与えておきたい。私が提案したいのは，「視点」という考え方である。(5)のような典型的な自省的態度の報告文は，それが用いられる際に主体の視

点をこめた報告となるのではないだろうか。すなわち、たとえば(5)はジョンに関する三人称的な報告であるが、この文はジョンの視点から彼の態度の内容を「見る」かのような仕掛けを持つのではないか。

試みに、(5)のようなタイプの報告文とは差し当たって無関係の例であるが、日本語の「がる」を考察して、この提案を説明してみよう。「がる」は「痛い」「寂しい」などの主観形容詞に付いて、対象の心の様子を描写するのに用いられるが、二人称、三人称の代名詞で表される対象について用いることはできても、一人称の代名詞で表される対象について用いることはできないと説明される。たとえば次は、「がる」を用いた適切な表現ではない。

(11) 私が痛がる。

このように人称性に言及することが一般的に「がる」について見られる説明だが、実際には次のような文が可能である。

(12) ぼくが痛がっているのに、なぜ君はつねるのをやめないんだ。

では、この文に現れている「がる」の働きをどう解釈すればよいだろうか。一つの提案は、この文の発話には行為の中止を求めている相手からの視点が進められていると考えることである。相手の視点から見れば「ぼく」は「痛がっている」対象である。この文は、こうした視点の移動によってより良く説明できる現象ではないだろうか。すると、「がる」の働きは、人称性によって説明されるのではない。むしろ、「がる」とは、形容詞によって述定される名辞が指示する対象のところに視点がある時に、それを形容詞に付けることが不適切になるような語なのである。(12)において、視点は行為の中止を求められている「君」の側に移動しているので、「痛い」が「僕」を述定していても、「痛い」に「がる」を付けることが適切なのである。

自省的態度の場合に移ろう。(5)のような文で主体の心的態度を報告する時

には、主体の側に視点を移動させて、主体が自分自身について抱いている心的態度を「見る」ことになる。(5)を発話する場合、報告者はジョンの側に視点を移動させて、ジョンが自分自身について持っている心的態度を参照する。この理由から、主体本人にとって身に覚えのないことについて、(5)のような文のタイプで報告することが不適切になるのである¹²。ジョンの場合と対照的に、カプラン教授の事例が適切な発話なのは、(4)“The audience knows that I will be late.”が聴衆へと視点を移動させるタイプの報告ではないからである。

以上の考察は、掘み取りにくい問題の核心に焦点をあてようという試みの域を超えない。問題の現象をより詳しく観察する作業は今後の課題である。とりわけ、(5)のようなタイプの報告文がどのような論理的性質を持つのかを特定することが課題となる。検討すべき課題のひとつは、日本語の主観形容詞や英語の他動詞に関する構文解析で成果を出している機能文法を、自省的態度の報告文の分析に取り入れる可能性である¹³。機能文法における基本的な概念である「共感度(empathy)」は、視点のアイデアを解析上の基本的な道具にすることを目的とするものである。以下で関連した問題を列挙する。本稿で筆者が述べた視点というアイデアは、厳密に共感度として読み替えうるようなアイデアなのだろうか。また、本稿における視点の概念は、十分に現象を切り分けるだけのきめの細かさを有しうるのか。この点に対して、現時点で否定的な答えが予想される。たとえば、(11)と(12)の違いは語用論的な現象であって、視点で捉えようとしているような意味論に関わる現象ではないという指摘がある。いまのところ、視点が有用性の保証もなく、定義も与えられていないことは事実である。こうした指摘に留意して、心的態度の報告文の意味論で役に立つ道具として、視点の概念を理論的に洗練させることが必要である。また、自省的態度の報告文と言表関与的態度の報告文の区別を与える上で、視点がどれほど有効な概念かということも検討する必要がある。

註

- 1 古典的な見解はフレーゲの意味理論の一部であり、彼の考え方によると、文の指示対象は真理値（真・偽）である。
- 2 この点を説得的に論じた古典的な文献として、Perry(1993)を挙げておく。
- 3 そうした問題に関して、大量の文献が存在する。古典的なものとして、Crimmins and Perry(1989), Lewis(1979)を参照してほしい。
- 4 元はKaplan(1989), p. 555 f. 71において *pseudo de re* の名で論じられていた現象である。本稿では筆者との会話において松阪陽一氏が用いた事例を使っている。
- 5 Higginbotham(2003), 同(2009)。
- 6 Higginbotham(2003), pp. 7-8 及び, § 4 を参照。
- 7 Higginbotham(2009), p. 6 を参照。
- 8 ヒギンボタムが“*experiencer of e*”を導入する狙いには統語論的な側面もある。ヒギンボタムは、(5)のゼロ代名詞が前方照応詞として独特の性質をもつと考える。彼は言語学の用語を使って、こうしたゼロ代名詞をPROと呼ぶ。彼の考えによると、このゼロ代名詞は指示について先行詞に依存するだけでなく、“John”が動詞winの補部(complement)の内に再帰的に現れていることを要求する。つまり、(5)のゼロ代名詞の位置には、“John”が現れているものと考えようというのである。PROの論理的性質についてどれほど多くの言語学者がヒギンボタムに同意するのかについては、文献を調査する必要がある。また、本稿の議論の範囲では、PROについての論述を省く方がポイントを見通しやすくなると思われるため、この点は註にまわした。
- 9 Kripke(1977)を参照。
- 10 Higginbotham(2009), p. 17 を参照。
- 11 その傍証はいくつもあるが、一例を挙げたい。彼は自省的態度を報告する文として“Mary is remembering [PRO kicking a football].”を分析する。そこでも彼は、(8)と同様の仕方でゼロ代名詞(PRO)を“*experiencer of e*”に書き換えた論理形式を提示している。彼はその際に、この文の補部の主語（ゼロ代名詞）が誤同定免疫を持つと述べている。（同上, p. 5 を参照。）

12 言表関与的な報告もまた主体が実際に持つ態度の内容を捉えるため、言表関与的な態度の報告にも自省的態度の報告と同様に視点を移動させる働きがあると言える。自省的であることと言表関与的であることが区別されるべきであるならば、これらを識別する他の要素があるのだろう。そうした要素を究明することは、他稿を期すことにしたい。

13 久野(1978)を参照。

文献

Davidson, D. (1980a). "The Logical Form of Action Sentences". In his *Essays on Actions and Events*, Oxford: Oxford University Press, 105-122.

———. (1980b). "The Individuation of Events". In his *Essays on Actions and Events*, Oxford: Oxford University Press, 163-180.

Castañeda, H. (1966). "He*: On the Logic of Self-Consciousness". In *Ratio* 8: 130-157.

Crimmins, M. and Perry, J. (1989). "The Prince and the Phone Booth: Reporting Puzzling Beliefs". In *Journal of Philosophy* 86: 685-711.

Hintikka, J. (1962). *Knowledge and Belief*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.

Higginbotham, J. (2003). "Remembering, Imagining, and the First Person". In Barber, A. (Ed.), *Epistemology of Language*, Oxford: Oxford University Press, 496-533.

———. (2009). "On Words and Thoughts about Oneself". ling.auf.net/lingbuzz/000915/current.doc. (2013年8月21日参照)

Kaplan, D. (1989). "Demonstratives". In Almog, J., Perry, J. and Wettstein, H. (Eds.), *Themes from Kaplan*, New York: Oxford University Press, 481-614.

Kripke, S. (1977). "Speaker's Reference and Semantic Reference". In *Midwest Studies in Philosophy* 2: 255-76.

久野暁(1978).『談話の文法』 東京:大修館.

Lewis, D. (1979). "Attitudes De Dicto and De Se". In *The Philosophical Review* 88: 513-543.

- Montague, R. (1974). "On the Nature of Certain Philosophical Entities". In his *Formal Philosophy: Selected Papers of Richard Montague*, New Haven: Yale University Press, 148-187.
- Perry J. (1993). "The Problem of the Essential Indexical". In his *The Problem of the Essential Indexical and Other Essays*, Oxford: Oxford University Press, 33-52.
- . (2007). "'Borges and I' and 'I'". In *Amherst Lecture in Philosophy 2*: 1-16.
- Salmon, N. (1986). *Frege's Puzzle*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Shoemaker, S. (1968). "Self-Reference and Self-Awareness". In *Journal of Philosophy* 65: 555-567.
- Stalnaker, R. (1981). "Indexical Belief". In *Synthese* 49: 129-151.